

目白台界隈の階段・坂と街を歩く

東京メトロ有楽町線 江戸川橋駅 改札口前 集合・出発

東京メトロ副都心線 雑司が谷駅で解散予定 約4.9km

1. 東京メトロ有楽町線 江戸川橋駅 1974（昭和49）開業。駅名は江戸川（現在の神田川）に架かる同名の橋から。

江戸川橋 神田川中流の早稲田付近から飯田橋駅付近までが江戸川と呼ばれていたことから。

2. 神田川 井の頭恩賜公園内の井の頭池に源を発し、両国橋脇で隅田川に合流する延長24.6kmの中小河川。かつては目白通り周辺は低湿地で氾濫原で川筋も蛇行していたが、護岸を造り河床を掘り下げるなどして周辺を道路や宅地とした。

神田川から日本橋川への川筋はかつて「平川」と呼ばれていたが、二代秀忠の時代に御茶ノ水付近が開削されて川筋が付け替えられ、関口から飯田橋までは江戸川、飯田橋から浅草橋までは神田川となった。1965（昭和40）の河川法改正で江戸川の名が廃止され、神田川に統一された。江戸川橋の名は当時の名残。

3. 神田上水 1590（天正18）に徳川家康の命を受けた大久保藤五郎（？～1617）によって開かれた上水道で、日本初の都市水道。江戸の六上水（神田上水、玉川上水、本所上水（亀有上水）、青山上水、三田上水（三田用水）、千川上水）のひとつで、古くは玉川上水とともに、二大上水といわれた。

関口大洗堰から巻石通りを経て、水戸屋敷に入った水は、邸内の飲料水や生活用水及び庭園の池水に使われ屋敷を出る。その後、御茶ノ水の懸樋（水道橋の由来）で神田川を横切り、まず神田の武家地に給水した。そこから三手に分岐し、一つは神田橋を経て、道三堀北側の大名屋敷に、もう一つは神田川北岸の武家地に、最後の一つは神田川南岸の武家地及び町人地に給水した。町人地に向かう水は更に二手に分かれ、一方は日本橋北側・内神田、もう一方は日本橋南側に給水していた。給水順序は武家地が優先で、残りの水を町人地へ給水していた。

神田上水は明治維新後も利用されていたが、江戸の上水道は浄水を行っていなかったため、1886（明治19）のコレラの大流行を抑えられなかった。これを契機として、1892（明治25）に改良水道の工事が開始され、1898（明治31）には大部分が完成し、淀橋浄水場が通水した。飲料水としての神田上水の使用は1901（明治34）までで、以後は水戸屋敷跡他に設けられた兵器工場（陸軍砲兵工廠）の工業用水として利用された。

4. 音羽通り 護国寺の建つ台地に向かう谷に江戸期からあった道。護国寺への参詣道。

5. 水窪川・音羽川（みずくぼがわ・おとわがわ） 雑司が谷霊園の北側付近を水源として、坂下通り付近を通り、音羽の谷の東側端を流れ、神田川に注いでいた。音羽の谷の両側の小川は江戸期～明治期には紙漉きで知られ、工場や問屋が多かったというが、都市化に伴い、大正初期にはなくなってしまったという。

6. 弦巻川（つるまきがわ）・**弦巻通り** 西池袋1丁目元池袋公園付近の湧水を水源として南東に流れ、山手線を越え鬼子母川の北側を流れる。雑司が谷1丁目を経て護国寺前で南に流れを変え、音羽通りの西側に沿って流れ、江戸川橋で神田川に注いでいた。池袋の地名はこの川の水源近くに多くの池があることに由来するとも言われる。1932（昭和7）に暗渠化された。

7. 首都高速5号池袋線 竹橋JCTから池袋を通り、埼玉県戸田市の美女木JCTに至る。全線開通は1993（平成5）、西神田出入口～北池袋出入口の区間は1969（昭和44）に開通。

早稲田出口 当初はここから高速練馬線が分岐する予定だったが、5号池袋線の混雑がひどく、練馬線が合流すると渋滞の悪化が予想されたことから、中央環状線より内側の練馬線の計画は放棄された。その後、余った接続構造を生かして、周辺住民の要望をもとに1987（昭和62）に出口が設置された。

8. 江戸川公園 関口台地の南斜面の神田川沿いに広がる公園。斜面に自生する雑木林と園路が主体。1984（昭和59）に神田川の拡幅工事に伴い改修された。園内に関口大洗堰が復原されている。斜面地にはデッキ状の遊歩道があり、斜面の樹木を痛めないようになっている。樹間をつづら折に登ると最上部につながり早稲田方面を見渡せる。

公園内の階段 最大130段（東側の階段：下から14・5・3・合・21・19・24・9・10・合・9・16段）（合：別階段との合流）
西側から93段（下から3・18・2・5・4・8・13・15・合・9・16段）

関口台町小学校そばの階段 13段

9. 関口大洗堰 (せきぐちおおあらいぜき) 駒塚橋の一つ下流側の大滝橋の場所にあった堰。上流からの水を左右に分け、左側を神田上水として水戸藩の江戸上屋敷(小石川後樂園)方面に流し、右側は余水として江戸川と呼ばれるようになった平川(現神田川)に流していた。堰の設置年代は不明だが、水戸藩邸に上水が引かれた1629(寛永6)以前には建設されていたらしい。

堰の規模は長さ10間(約18m)、幅7間(約12.6m)、水口8尺余(約2.42m)で、石造りの巨大なものだった。関口という地名は、この大洗堰に因むという。流水が大滝となって落ちる様子が壮大で『江戸名所図会』に「目白下大洗堰」として紹介される名所だったが、1937(昭和12)に江戸川の改修の際に取り壊された。

10. 目白坂 坂の南側に新長谷寺という寺が以前はあり、本尊が目白不動尊と呼ばれたことに因むといわれる。この目白不動尊は三代将軍家光が「目白」の号を授けたことに由来するとも言われる。目白通りの江戸期の道筋は、現在の目白坂下南交差点を起点としてこの目白坂を上るもの。

11. 新坂(目白新坂・椿坂) 南側にある目白坂のバイパスとして、明治20年代の半ば頃に新しくつくられた坂。別名の椿坂は、周辺が椿山と呼ばれていたことに因む。目白坂に比べて道幅が広く、傾斜は緩やか。

目白通りから南西へ上る階段1 28段 やや急 **目白通りから南西へ上る階段2** 12段

目白通り 目白坂下を起点とし、目白台の高台を西進する江戸期からの尾根道。西落合1丁目交差点で新目白通りと合流し、更に練馬駅付近、関越自動車道練馬I.C.、大泉学園に至る。1676(延宝4)に、尾張徳川家の御鷹場が中清戸(現清瀬市)につくられ、将軍もしばしば出かけて鷹狩りを行ったことから、江戸期には江戸清戸道と呼ばれていた。

12. 七丁目坂 旧音羽七丁目から、西の方目白台に上る坂ということで七丁目坂とよばれた。

50段(下から31・19段) ステップの大半は2段一組。途中で目白通りから入ってくる車道と接続している。

幅2.7~4.5m 高低差約11m 長さ約40m 蹴上10~16cm 踏み面不規則 傾斜約15° 『東京の階段』p.117

13. 鳥尾坂 (とりおごか) 明治期、隣の鉄砲坂が、人力車や自動車にとって急すぎたので、付近に住んでいた鳥尾家(鳥尾小弥太(陸軍軍人、貴族院議員、子爵))が、私財を投じて坂道を開いた。地元の人々はこれに感謝をして「鳥尾坂」と名づけ、坂下の左わきに坂名を刻んだ石柱を建てた。

14. 鉄砲坂 坂下の東京音楽学校学生寮のあたりは、江戸時代には崖を利用して鉄砲の射撃練習をした場所だった。その近くの坂ということで「鉄砲坂」とよばれるようになった。

15. 三丁目坂 旧音羽三丁目から、西の方目白台に上る坂ということで三丁目坂とよばれた。

16. 東京カトリック聖マリア大聖堂 カトリック関口教会(1900年創立)の教会堂で、カトリック東京大司教区の司教座聖堂。最初の聖堂(1899(明治22)築)は木造ゴシックの建物だったが、東京大空襲で焼失。

現在の大聖堂は1964(昭和39)竣工。RC造、ステンレス張り、設計:丹下健三。上空から見ると十字架型で、ねじれた3次元曲面をした8枚の壁面が中央に倒れ込むようにして、壁・屋根となっている。複雑な屋根形状のため建設直後から雨漏りがあったが、2006~07に改修された。コンクリート打ち放しの内壁は禁欲的で静謐な印象で、金属で光り輝く外観からは想像しにくく意外性がある。内部の高さは40m近く、残響は空席時で約7秒。鐘塔は高さ61.68m。

現在のパイプオルガンは二代目。初代のもの(電動式)が、雨漏りや部品の老朽化でメンテナンスしにくくなったため、イタリア製の機械式(送風は電動、音色のコンピューター管理は有り)のものが2004(平成16)に設置された。3,200本のパイプを持つ日本最大のパイプオルガン。なお、丹下健三はこの大聖堂と同じ1964(昭和39)に代々木屋内競技場も設計・完成させている。「DOCOMOMO JAPAN選定 日本におけるモダン・ムーブメントの建築」

17. 東京大学目白台国際宿舎(仮称) 東京大学医学部附属病院分院の跡地に建設中の施設。宿舎内に日本人学生とアジアからの留学生、約800人が住む予定。8F 2019.7竣工予定。

東京大学医学部附属病院分院 2001(平成13)閉鎖。2010年頃まで残されていた本館は恐らく戦前の建築で、東大本郷キャンパスの建物と似た外観だったが、主な建物は解体され、門、門衛所と塀のみが残存している。

18. 葉罐坂 (夜寒坂・やかんざか) 江戸時代、坂の東側(現在の筑波大学付属盲学校一帯)は松平出羽守の下屋敷で、維新後上地され国の所有となった。また、西側には広い矢場があり、当時は大名屋敷と矢場に挟まれた淋しい所だったらしい。

やかんは、野カンとも射干とも書き、犬や狐のことをいう。野犬や狐の出るような淋しい坂道であったらしく、また、葉罐のような化物が転がり出た、とのうわさもあった。夜寒坂は、この地が「夜さむの里道」とも呼ばれたことによる。

19. 椿山荘 (ちんざんそう) 関口台周辺は南北朝時代から椿が自生する景勝地で「つばきやま」と呼ばれていた。ここを山縣有朋(1838~1922(天保9~大正11))が1878(明治11)に購入し、「椿山荘」と命名。1918(大正7)には大阪を本拠とする藤田財閥の二代目当主藤田平太郎男爵がこれを譲り受け、東京での別邸とした。戦災で一部が焼失したが、1948(昭和23)に藤田興業の所有地となり、その後1万余の樹木が移植され、1952(昭和27)から結婚式場となった。1992(平成4)には敷地内にフォーシーズンズホテル椿山荘東京が開業した。

三重塔(圓通閣) 室町時代中後期(1420-1572)に広島県賀茂郡の竹林寺に建設されたものを、1925(大正14)に庭園内に移築したもの。2011年に内部に制震ダンパーを設置して耐震補強を行った。国登録有形文化財

20. 講談社野間記念館 講談社創業90周年事業の一環で2000年に設立された。創業者、野間清治が大正期から昭和初期にかけて収集した美術品を主体とする野間コレクションや、明治から平成にわたり蓄積されてきた出版文化資料などを展示。建物は旧社長宅を改装したもので、4つの展示室と休憩室からなる。建て替えのため休館中

21. 蕉雨園 (しょううえん) 明治時代の宮内大臣田中光顕伯爵の邸宅。1897(明治30)建設。1919(大正8)に渡辺治右衛門(渡辺銀行総裁)に譲られ、その後、1932(昭和7)に講談社初代社長の野間清治が購入した。茶会や映画ロケなどで利用されているが、原則非公開。

22. 関口芭蕉庵 (せきぐちばしょうあん) 松尾芭蕉が二度目に江戸に入った後、旧主筋の藤堂家が神田上水の改修工事を請け負い、これに従事した芭蕉は、1677~80(延宝5~8)に、付近の水番屋に住んだといわれる。芭蕉の33回忌にあたる1726(享保11)に、芭蕉やその弟子らの像を祀った「芭蕉堂」が作られ、更に1750(寛延3)には、供養のため芭蕉の真筆の短冊を埋めて作られた「さみだれ塚」が建立され、次第に「関口芭蕉庵」と呼ばれるようになった。

1926(大正15)に東京府(現東京都)の史跡に指定。建物は第二次世界大戦の戦災などで焼失し、現在のものは戦後に復元されたもの。講談社・光文社・キングレコードらが中心となって設立した関口芭蕉庵保存会によって維持管理され、池や庭園などもかつての風情を留めた造りとなっている。(10:00~16:30開園、月・火曜休園)

23. 胸突坂 坂が険しく、自分の胸を突くようにしなければ上れないことからつけられた名前

82段(下から55段・上から27段のあたりでやや屈折) 『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』pp.088-089

幅2.6~3.0m 高低差約15m 長さ約70m 蹴上9~10cm 踏み面58~120cm 傾斜約16° 『東京の階段』p.62

永青文庫 旧熊本藩主細川家伝来の美術品、歴史資料や、16代当主細川護立の収集品などを収蔵し、展示・研究を行っている日本・東洋の古美術を中心とした美術館。新江戸川公園同様、細川家の旧屋敷地で、建物は細川家の事務所だったもの(1930(昭和5)完成)。一般公開は、当主が第17代細川護貞になった1972年(昭和47)から。

文庫は1950(昭和25)に第16代当主細川護立(1883~1970)によって設立されたもので、「永青」は細川家の菩提寺である正伝永源院(建仁寺塔頭)の「永」と、細川藤孝の居城・青龍寺城の「青」から採られている。

水神社(すいじんじゃ) 創建年代不詳。神田上水が建設されて以来、関口大洗堰と神田上水の守護神として祀られたという。

水神社の階段 30段(下から9・21段) 高低差約5.5m 長さ約7m 蹴上17~20cm 踏み面21~26cm 傾斜約35°

24. 財団法人 和敬塾(わけいじゅく) 前川喜作(前川製作所の創業者)によって1955(昭和30)に創設された、男子大学生・大学院生向けの学生寮。塾生は約450名で留学生もあり、塾生が所属する大学は約50校。村上春樹は大学1年の春から秋まで塾生だったが肌合わず退寮した。代表作『ノルウェイの森』に出てくる寮は、和敬塾をモデルにしているといわれる。

現在は敷地が分割されているが、以前は新江戸川公園、永青文庫の敷地までもが細川邸だった。元首相の細川護熙も幼少時に過ごしていたという。年に数回の公開以外は敷地も含めて原則非公開。

本館 1936(昭和11)竣工。細川護立(元首相細川護熙の祖父)が細川侯爵家の本邸として建てた西洋館で、昭和初期の代表的華族邸宅。3F・B1F。英国チューダー様式を基調に、卍崩しやサラセン風のデザインなどを取り入れている。戦後に連合軍に接収され、一部が改修された。東京都指定有形文化財。

25. 文京区立 肥後細川庭園 一帯は江戸時代中頃まで幕臣の邸宅があったところ。その後、幾度かの所有者の変遷を経て、幕末に細川家の下屋敷になり、明治期以降、細川家の本邸となった。1960年に東京都がここを購入し、翌1961(昭和36)に「新江戸川公園」として開園。1975(昭和50)に文京区に移管され現在に至る。付近は目白台からの湧水が豊富で、それを活かした江戸時代の大名屋敷の回遊式泉水庭園の雰囲気を感じることができる。現在は「新江戸川公園パークアップ共同体」が指定管理者として管理。2017年までの改修工事を経て、公募により肥後細川庭園に名称変更された。

松聲閣 (しょうせいかく) 元々細川家の学問所で1887 (明治20) 頃の建物。一時期は細川家の住まいとしても使われていた。公園になってからは集会所として使われていたが、老朽化のため一時利用休止。歴史性を生かして保存・修復を行うとともに、耐震性を確保し、2016年1月に再オープン。集会室、休憩室、展望所 (2F) として利用されている。

26. 幽霊坂 (和敬塾西側) 昼でも薄暗く、幽霊が出そうな雰囲気だということから付いた名。最大傾斜21%
『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』 pp.088-089

27. 中島屋酒店 1933 (昭和8) 築の銅板張り看板建築。2018~19に解体。

28. 文京区目白台運動公園 国家公務員共済組合連合会 (KKR) 目白運動場跡地と、隣接する国有地跡地に造られた公園。KKR目白運動場は、50年近く組合員、近隣住民、文京区民に親しまれたが、2005 (平成17) に閉鎖。跡地を文京区が取得し、田中家が国に物納した土地を合わせて公園として再整備した。2009 (平成21) 開園 約30,000㎡ 国家公務員共済組合連合会目白運動場の場所は、明治~戦前期には細川家の邸宅敷地の一部だったもの。ここには細川家本邸の大きな洋館があったが、関東大震災で被災して消失した。

田中邸 田中角栄 (1918~93) 自邸、目白御殿、現 田中真紀子邸

目白の土地購入時期は、戦前とも戦後の自由民主党幹事長の頃とも言われるが未把握。相続税を払うために目白通り沿いの土地を物納したため、現在は門だけが通りに面している。なお、この門も建て替えられている。

29. 日本女子大学 1901 (明治34) 日本女子大学校として創立。

1948 (昭和23) 学制改革によって新制大学としての日本女子大学が発足。

成瀬記念講堂 1906 (明治39) 竣工、1924 (大正13) 修築 豊明図書館兼講堂として建設された。当初の外壁は煉瓦壁だったが、関東大震災で被災したため、翌年、外壁や間仕切りの煉瓦を取り除き、木造建築として再建。内部は創建時の部材を保存・使用しており、木骨トラスやステンドグラスなどは建設当初のまま。1961 (昭和36) に創立60周年記念事業として補修工事が行われ、その後、創立者成瀬仁蔵の名を冠して成瀬記念講堂に改名。西洋の教会堂を思わせる洋風建築として本格的なもので、明治時代の学校建築として貴重。文京区有形文化財。 **成瀬記念館** 設計：浦辺鎮太郎 1984 (倉敷アイビースクエア)

附属図書館 設計：妹島和世・清水建設 2019 **附属豊明小学校** 設計：内井昭蔵 1997 (世田美、明治学院大、ベルコリーヌ南大沢)

30. 幽霊坂 (日本女子大学西側) 江戸期に道の西側に本住寺という寺があり、幽霊が出そうな雰囲気だったことから。

31. 清戸坂 (清土坂) (きよとぎか・せいどぎか) 目白通りは江戸期に「清戸道」と呼ばれており、その清戸道へ上る坂ということでこの名がついた。

32. 豊坂 (とよさか) 坂名は、坂下に豊川稲荷社があることから。江戸期この一帯は、大岡主膳正の下屋敷で、坂は明治になって開かれたもの。坂を下ると神田川には豊橋が架かる。

33. 小布施坂 (こぶせざか) 江戸時代、鳥羽藩主稲垣撰津守の下屋敷と、その西にあった岩槻藩主大岡主膳正の下屋敷の境の野良道を、1761 (宝暦11) に新しい坂道として開いたもの。坂名は、明治時代に株式の仲買で財をなした小布施新三郎という人の屋敷があたり一帯にあったため。古い坂だが、名称は明治期のもの。近年の階段坂周辺でのマンション建設により、段々に斜路が設置されたりしており、階段の様子がかなり変化している。25段 (下から10・6・5・4段)

環状4号線 外苑西通り~不忍通り 小布施坂の東側で、日本女子大学附属豊明小学校の西側をトンネルで抜け、目白台2丁目交差点の下を通り不忍通りに合流する計画。現在、用地買収・建設準備中で、建物が解体され空地化した場所が増えている。

34. 富士見坂、日無坂 (ひなしざか)

富士見坂 坂上から西方に富士山がよく見えていたことから。富士は坂の方向よりも西方向であるため、現在は見えない。

日無坂 16段 幅1.9m 高低差約6m 長さ約27m 蹴上10~12cm 踏み面不規則 傾斜約13° 『東京の階段』 p.64

坂名は、道がとても狭く、左右の樹木が覆い被さって日がささなかったことからといわれる。

35. 鳳山酒店 出桁造りの酒屋 大正時代末期の建物という。

36. 稲荷坂 坂上東側の住宅庭先にお稲荷様の小さな社があり、これが坂名のもとになったらしい。高田稲荷大明神と呼ばれていたそうで、戦前はよそからの参詣人もあったといわれる。

37. 煉瓦造の階段 19段 煉瓦でベースが造られており、表面がモルタルで覆われている。

- 38. 高田の急階段** 階段上から早稲田、新宿界隈を望むことができ、神田川の谷地を見渡すことができる。晴海トリトンスクエアの頂部も見える。『東京の階段』p.84
21段（下から1・9・11段） 幅3.8m 高低差約4m 長さ約6m 蹴上18~20cm 踏み面26~28cm 傾斜約35°
- 39. 根生院**（こんしょういん） 市区改正に伴い1903（明治36）に下谷池之端七軒町から移転。現在地は、江戸時代は武家屋敷で、幕末期には備後福山藩阿部家の抱屋敷だった場所。戦災により山門を除く全てが焼失。現在の堂は2002年の改築。
- 40. 南蔵院** 創建は室町時代と伝えられる。もとは大塚・護国寺末の寺で、高田氷川神社の別当。江戸期には徳川家光が鷹狩りの際に立ち寄りたりもしたという。（別当寺：神仏習合が許されていた江戸時代以前に、神社に付属して置かれた寺。）
- 41. 宿坂**（しゆくざか） 中世の頃、このあたりに「宿坂の関」と呼ばれる関所が設けられていたことに因む。宿坂の関は、鎌倉街道の道筋にあったものといわれる。この鎌倉街道は宿坂の道の少し東側を通っていたらしい。また、練馬方面から江戸に来る時、ここで一泊せねばならなかったためという説もある。
- 旧鎌倉街道** 鎌倉時代の街道のうち都内を通る道としては、鎌倉から府中を抜けて上野国へ至る上道（かみつみち）、二子を抜けて下野国へ至る中道（なかつみち）、下総国や常陸国へ至る下道（しもつみち）があるとされる。都内の中道はいくつかのルートがあったようで、豊島区高田付近を通るルートは、多摩川の二子の渡しから、現在の上野毛通り、目黒通りを抜け、中目黒から渋谷を経由して、戸山、西早稲田、高田を経て北上し、岩淵の渡しで荒川を渡るもの。
- 42. 金乗院**（こんじょういん） 真言宗豊山派 天正年間の頃（1573~92）の創建
- 目白不動** もともとは文京区関口の目白坂沿いにあった真言宗の新長谷寺（しんちょうこくじ）の本尊。弘法大師が出羽・湯殿山に行き修行を行っていた際に造られたといわれている像で、それが武蔵国関口に住む者の手に渡ったといわれる。
1618（元和4）に二代将軍秀忠の命で、奈良、長谷寺の僧によって中興されて本堂なども建立され、新長谷寺と命名された。寛永年間には三代将軍家光により、本尊である不動明王像に五色不動のひとつとして『目白不動』の名が贈られた。しかし戦災で被災し1945（昭和20）に廃寺となったため、目白不動は金乗院に移された。この不動明王像は、明王が自ら左腕を断ち切りそこから火焰が噴き出す姿をしている。
- 五色不動** 徳川家光が天海僧正の建言により江戸府内から5箇所の不動尊を選び、天下太平を祈願したことに由来する等の伝説があるが、実際に「五色不動」の名称が文献に登場するのは明治末~大正初期で、江戸時代の史実とは考えにくいとされる。ただ、個々の寺院や不動像自体は江戸時代（以前）からの歴史を持つとされ、特に目黒不動・目白不動・目赤不動については江戸時代の資料からもその名称が確認でき、当時から江戸名所として『三不動』の名で知られていた。
目黒不動：瀧泉寺（目黒区下目黒） 目白不動：金乗院（豊島区高田） 目赤不動：南谷寺（文京区本駒込）
目青不動：教学院（世田谷区太子堂） 目黄不動：永久寺（台東区三ノ輪）・最勝寺（江戸川区平井）
地名の目白や目黒は、目白不動や目黒不動に因むという話もあるが、地名が先で、それに因んで目白不動と呼ばれるようになったとの説もあり、明確ではない。また、目黄不動は浅草勝蔵院の明暦不動がなまってきたと言われるがこれは既に無く、その後、複数の目黄不動ができています。
- 43. のぞき坂** 東京で最も急な坂ともいわれ、坂の上から見ると下を覗き込むようであることから。別名胸突坂。
勾配22%：100mあたり22m上る傾斜（角度では約12.4°）。
- 44. 東京メトロ副都心線 雑司が谷駅** 2008（平成20）池袋―渋谷が開業。
- 明治通りバイパス** 混雑する池袋駅前を回避するため、池袋六又陸橋から千登世橋までを迂回するバイパスの建設が、平成31年度開通を目標に進められている。既にサンシャイン付近の首都高高架下部分は開通。残りは東京メトロ副都心線の地上で工事中。鬼子母神前駅周辺では、以前は住宅地の裏側を都電が走っていた。
- 都電荒川線・鬼子母神前**（きしばじんまえ）
1911（明治44） 飛鳥山―大塚 王子電気軌道として開業
1925（大正14） 大塚駅前―鬼子母神前 開業 1928（昭和3） 鬼子母神前―一面影橋 開業
1942（昭和17） 電力統制と交通統制により東京市に事業譲渡。東京市電となる。翌年、東京都が成立し都電となる。
1974（昭和49） 都電荒川線へ呼称変更。

45. 千登世橋 1932 (昭和7) 完成の鋼製アーチ橋 橋長28.0m 幅員18.2m

明治通り建設の際、斜面に沿って上ると急傾斜になるため、切り通しを造って池袋方面へ緩やかに上る坂道とし、目白通りとは立体交差するよう、この橋が造られた。幹線道路同士の立体交差としては都内で最初期のものであり、今なお現役であるため土木技術的価値も高く「東京都の著名橋」の一つとされている。明治通りと目白通りが斜めに交差しているため、橋の平面型は平行四辺形をしている。また、橋詰広場には河川や道路の改修などに功績のあった、東京府土木部長の來島良亮を讃える碑 (昭和9) が建っている。1990 (平成2) に町の美観と調和させるため、親柱や高欄の意匠が改修された。橋上からは南側に西新宿の超高層ビル街、北側には池袋のサンシャインシティなどが見える。

千登世小橋 都電荒川線を跨ぐ方の橋。親柱のデザインは千登世橋と異なるが、一体のものとして同時に造られている。

東詰南側の階段 35段 (下から18・17段) **西詰北側の階段** 26段 (13・13段)

東詰北側の階段 30段 (下から14・15・1段) 東詰北側の階段は、後年開設されたもので橋本体とはデザインが異なる。

明治通り (環状5号線) 1927 (昭和2) の都市計画に基づき、東京初の環状道路となる環状5号線として整備された道路。

46. 威光山 法明寺 810 (弘仁元) 真言宗威光寺として創建。 1312 (正和元) 日源上人が日蓮宗に改宗し、法明寺に改称。

47. 鬼子母神堂 (きしもじんどう) 法明寺の飛地境内にある堂。1561 (永禄4) に山村丹右衛門が現在の目白台のあたりで鬼子母神像を井戸から掘り出し、東陽坊に祀ったのが始まりとされる。現在の社殿は1664 (寛文4) の建立で、豪華な彫刻が施されている。拜殿が入母屋造で、本殿が流造という変型の権現造だが、これは、建設当初は相の間がなく、1700 (元禄13) に付け加えられたため。東京都指定有形文化財。

鬼子母神 毘沙門天の部下の武将、般闍迦 (パンチーカ) の妻で、500人の子の母でありながら、常に他人の子を捕えて食べてしまうため、釈迦は彼女が最も愛していた末子を隠して子を失う母親の苦しみを悟らせ、仏教に帰依させた。以後、仏法の護法善神となり、子供と安産の守り神となった。盗難除けの守護とも言われる。

けやき並木 目白通りから北へ入り、けやき並木を経て鬼子母神堂へ至る道が昔からの主たる参道。

並木ハウス 1953 (昭和28) 築 国登録有形文化財 1953—55 (昭和28—30) には、手塚治虫と建築写真家の二川幸夫が2階に住んでいた。**並木ハウスアネックス** (砂金家長屋) 1932 (昭和7) 築 5軒の棟割店舗兼用住居長屋 国登録有形文化財

【周辺の町名】

目白 (豊島区) もともとは北豊島郡長崎町、高田町、雑司ヶ谷町、巢鴨町の各一部。1932 (昭和7) に東京市に編入され、豊島区の一部となり、目白町となる。1966 (昭和41) に住居表示の施行に伴い、豊島区目白一〜五丁目となった。高台の住宅地としてのいわゆる目白は、駅西側の新宿区下落合・中落合・西落合・中井の高台を含む。目白御殿で知られる田中角栄邸は文京区目白台で、目白台も目白と扱われたりしており、妙正寺川、神田川に南面した高台の総称ともいえる。

雑司が谷 (豊島区) ①付近の林野が、法明寺の雑司 (農作物などを物納・納税させ、寺社の経済的な支えとする所有地) に充てられていたという説、②南北朝時代の元弘・建武 (1331~36) の頃、雑色職を務めていた人たちが南朝の衰えを嘆いて都を捨て、この辺りに土着したことからとする説、③郡領などの子を指す「曹司」が始めた土地という意味の曹司ヶ谷からという説がある。様々な字が当てられていたが、八代將軍吉宗が鷹狩に訪れた際、「雑司ヶ谷と書くべし」と命じたという。

高田 (豊島区) 崖や急な傾斜面に段々畑で耕地を開発したことからと云われる。

高田老松町 (文京区) 昭和40年代に住居表示の施行で目白台一丁目となった場所などの旧町名。細川邸の門前にあった「鶴の松」「亀の松」(合わせて鶴亀松)に由来するという。二本の松は明治後期と昭和初期に共に枯れ死。

参考文献・参考サイト

『東京の階段』松本泰生、日本文芸社、2007 『川の地図辞典—江戸・東京23区編』菅原健二、之潮、2007

『江戸東京坂道事典』石川悌二、新人物往来社、1998 『今昔東京の坂』岡崎清記、日本交通社出版事業局、1981

『凹凸を楽しむ 東京「スリバチ」地形散歩』皆川典久、洋泉社、2012

『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』松本泰生、洋泉社、2017

東京23区の坂道 <http://www.tokyosaka.sakura.ne.jp/index.htm> 坂学会 <http://www.sakagakkai.org/>

東京の階段 DB <http://blog.goo.ne.jp/tokyostair/> 都市徘徊Blog <http://blog.goo.ne.jp/asabata/>